# AMDA 多様性の共存 ャーナル

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717 E-mail:member@amda.or.jp

発行 / AMDA 〒 700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1

2025年1月25日 VOL.48 第312号



冬号

#### 救える命があればどこまでも

## 「相互扶助」が世界の共通語と

特定非営利活動法人 AMDA 副理事長 難波

特定非営利活動法人アムダ(AMDA) https://amda.or.jp/ 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構 https://www.amda-minds.org/ 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター https://www.amdamedicalcenter.com/ AMDA 兵庫 http://amda-hyogo.com/

2024年、AMDA は創立から 40 周年 を迎えました。菅波茂前理事長が医学生 時代にアジアを一人で旅した際、現地に おける多様性と活気に魅せられたことが 一つの原点となり、そこから、医療を通 じた国際貢献を世界各国で行ってきまし た。AMDA が行ってきた災害、紛争、貧 困に対する緊急医療支援活動は、2024 年12月末の時点で、69ヶ国249件に 上ります。

私が AMDA でボランティアを始めた 2003年当時、菅波前理事長の口癖は、「相互扶助という 言葉を世界の共通語にしたい」というものでした。変わっ た組織だなという印象とともに、その深い意味がすぐに は理解できなかったことを今でも覚えています。

あれから20年が過ぎ、この間にも、スマトラ島大津波、 ハイチ大地震、東日本大震災、ネパール大地震、熊本地 震、西日本豪雨、ウクライナ人道危機など、各地で災害 や紛争が頻発しました。多くの人たちの苦難、涙、そし て、危局後に追い打ちをかけた試練に AMDA は何度も向 き合ってきました。

目の前に次々と立ちはだかる困難に必死にもがいてい ると、"困った人を助けたい"という多くの派遣者、支援 者の願いは大きなエネルギーの渦となり、人脈、知恵、 資金などに形を変えます。こうして人道支援活動は、点 から線に繋がり、面となって、国を越えて広がります。

また、時を経て、「受けた支援の恩送り」と、自らの 被災経験を活かした支援が届けられる場面にも出会いま した。研修に参加した医学生が、その後、医師となって AMDA の活動に戻ってきてくれた際には、感謝と喜びに 心が震えました。

このような時の流れにあって、「困った時はお互い様」 という相互扶助の理念が国境、宗教、文化を越えた多様 性の中に息づいていることを、私は身をもって経験しま



した。1998年のある記事の中で、菅波前理事長は、「相 互扶助によって、世界の人々がお互いに対等なパートナー として信頼と尊敬の念で結ばれた時、そのネットワーク は市民の側からの大きな戦争の抑止力になるに違いあり ません」と語っています。

2025年、21世紀の四分の一が過ぎようとしているに も関わらず、政治的な分断や経済不況、感染症の流行や 気候変動などで、世界は未だ不安定な局面を迎えていま す。加えて、デジタル技術が生活の中心となり、便利さ が増すほどに、人は、人としての大切な感覚を忘れ、対 人関係が希薄になる危うさをはらんでいます。そのよう な中、AMDA のこれまでの活動は、相互扶助の精神こそ、 「直接人の心に響く人間の本質である」と教えてくれます。

昨年、AMDAの新理事長に就任した佐藤拓史医師 は、数々の災害支援の現場で24時間被災者に寄り添う ことを信念としてきました。多くの方々とともに"チー ム AMDA"として取り組むことができれば、「相互扶助」 は、今世紀の終わりまでには世界の共通語になるかもし れません。そんな期待を抱きながら、これまでの道のり をともに歩んできてくださった方々に想いを馳せ、同時 に、これからの出会いを次世代に向けて繋ぎたいと心か ら願っております。

## フィリピン台風被災者緊急支援活動



10月22日にフィリピンの東の海上で発生した台風20号に伴い、AMDAは、フィリピン支部および現地協力団体とともに、ルソン島ビコール地方とカラバルソン地方において緊急支援活動を実施しました。台風20号を皮切りに、フィリピンでは一ヶ月間で6つの連続した台風が発生。支援活動も、被害の大きかったルソン島を中心に6回にわたって行われました。

医療支援活動では、1,000 人を超える被災者を診察。高 血圧、咳などの風邪症状、筋肉痛を訴える方が多く見られ、 重篤なケースが疑われた場合は、最寄りの医療機関に紹介

しました。また氾濫した水の中を歩くことで傷を負い、真菌感染を起こしている例も見られました。物資支援においては、 被災した 1,100 世帯に日用品を提供し、回によっては食料も配布しました。

一方、子どもたちから、「雨が降ると洪水に見舞われる」との不安の声が聞かれたため、AMDAでは、児童を対象としたメンタルヘルスプログラムを実施。 200人近くが参加しました。

活動をともにした現地大学の関係者は、「大勢の人が家と仕事を失いました。 被災した家を修理しようにも、住民の多くは日雇い労働者で、収入源が絶たれ ています。このような時こそ、互いに助け合い復興を行っていく、私たちの回 復力が発揮されるでしょう」と話しました。



#### [活動詳細]

- ① 11 月 2 日:ビコール地方・南カマリネス州カマリガン町における医療・物資支援活動・メンタルヘルスプログラム
- ② 11 月 2 日:同州マガラオ町における医療・物資支援活動・メンタルヘルスプログラム
- ③ 11 月 3 日:同州ナブア町における医療・物資支援活動・メンタルヘルスプログラム
- ④ 11 月 10 日:カラバルソン地方バタンガス州ローレル町における医療支援活動・メンタルヘルスプログラム
- ⑤ 11月16日:同州タリサイ町への医薬品と衛生用品を寄贈
- ⑥ 11 月 26 日: ビコール地方カタンドゥアネス州における物資支援活動

## ~ビコール地方カタンドゥアネス州パンガニバン町での活動に参加した AMDA 小川直美看護師からの報告~



11月16日、台風24号がカタンドゥアネス州に上陸し、甚大な被害が発生しました。AMDAは過去にも同州で活動した経緯があり、その時の現地協力者であったパンティ氏およびメルカド氏からの支援要請を受け、11月22日、日本から看護師1名、調整員1名を派遣して、支援活動を行いました。

カタンドゥアネス州では、被災した自治体であるパンガニバン町、フィリピン

看護協会カタンドゥアネス支部、ならびに地元 のボーイスカウトと協力して、物資支援を実施。 被災した 500 世帯の住民に、お米やイワシの

缶詰、コーヒーなど、食料品を中心とした物資を提供しました。

現地では多くの家が全壊し、住民の方々は自分たちの手で家の修繕を行っていました。また収入源であるマニラ麻も被害を受けており、明日の食糧を心配する声も聞かれました。このような状況の中、日本からの支援は大変感謝され、AMDAはパンガニバン町と看護協会から賞状を授与されました。

### ~フィリピン台風被災者緊急支援活動街頭募金~

11月27日、イオンモール岡山地下入り口付近にてフィリピン台風被災者緊急支援活動に対する街頭募金を実施しました。当日は、AMDA中学高校生会をはじめ、岡山倉敷フィリピーノサークルの皆さんにもご協力いただきました。寒い中、募金に足をとめてくださった方々、誠にありがとうございました。

(プロジェクトオフィサー 岩尾 智子、小川 直美)



## ウクライナ危機から 1,000 日以上が経過した今









2022年2月24日に勃発した人道危機から1,000日以上が経ち、ウクライナでは3度目の厳しい冬を迎えています。時間の経過とともに、避難者の置かれている状況も変わってきています。海外に避難していた多くの人がウクライナに戻ってきている今、比較的安全な西部の町は人口が2倍になり、住宅不足や失業問題が発生しています。当初は、自分の身の安全を守るため、着の身着のまま緊急避難してきた方へ服用中の薬の処方をしたり、避難中に負った外傷や急性ストレス反応への対応をしたりと、緊急的なサポートが中心でした。一方、現在は長期的なストレスが原因と考えられる不安障害、頭痛、消化性潰瘍などの症状を訴える方が多くいます。生まれ育った地元を離れ、将来に不安を抱えながら生活する国内避難者への継続的な支援の重要性が増しています。

東部の戦闘地域から約20キロに位置するハルキウに住む人々の生活は、依然として厳しい状況です。時期によりますが、数日に1回、ミサイルや爆撃の音が聞こえる中での生活を住民は強いられています。子どもたちは安全確保のために地下にある防空壕で学ばざるを得ず、長時間換気の悪い場所にいることが原因で健康問題が発生するなど、環境は決して良いとは言えません。商店は通常通り営業しており、物流も今のところは正常に戻ってきている一方、医薬品が手に入りにくい状況は改善されていません。

さらに、電力供給に不安があるため、ウクライナ国内で活動する AMDA の 各協力団体は、発電機を購入したり、燃料購入に充てる費用を捻出するために 他の支出を抑える工夫をしたり、と知恵を絞って厳しい冬に向けて備えてきました。物価や燃料の高騰、地域によっては継続的な爆撃による被害もあり、多大なストレスを抱える中、ウクライナに住む人たちは力を合わせて懸命に日常 生活を送っています。

2022 年 3 月より活動を始めた AMDA は、現在、医療支援と食糧支援を中心とした活動を行っています。今後も現地協力団体とともにウクライナ国内避難者へのサポートを継続していきます。

(ウクライナ担当 岩尾 智子)









- sogo・fujo - AMDA ジャーナル 2025.1 3

## モンゴル内視鏡技術移転事業

2017年に始まったモンゴル内視鏡技術移転事業は、日本人医師、モンゴル人医師がともに治療にあたることで同国内の内視鏡治療技術の向上を目指しています。今年度は9月30日から10月5日まで、小倉記念病院消化器内科主任部長の白井保之医師、AMDAの佐藤拓史理事長が、モンゴルの医師免許の下、日本モンゴル教育病院内視鏡医チームとともに、胃静脈瘤ヒストアクリルによる内視鏡的塞栓療法3例、EISL1例、食道静脈瘤 EISL6例、ダブルバルーン小腸内視鏡1例、6名の上部・下部内視鏡検査を行いました。この他にも白井医師による専門講義や、佐藤理事長によるシミュレーターを使った下部内視鏡のトレーニングなども行いました。





#### ■ 白井医師のコメント

「モンゴルは肝硬変の頻度が高く、食道胃静脈瘤の治療を必要としている人が多くいることを実感しました。日本では滅多に見ないような大きな静脈瘤の症例を短い期間に沢山経験しました。そして内視鏡の技術や治療戦略、デバイスや薬剤が十分でなく、日本で行われているような治療が十分なされていないという現実を目のあたりにし、モンゴルに十分な静脈瘤治療を届けたいという気持ちが沸き上がりました。

今回で3回目となる研修では、胃静脈瘤に対してヒストアクリルという瞬間接着剤を静脈瘤の中に打ち込む治療をより 安全に行う方法をレクチャーし、実際に治療を行いました。リスクの高い大きな静脈瘤に対する治療が多く、冷や汗も出 ましたが、トラブルもなく治療を終えることができて安心しました。モンゴルの医師たちは非常に勉強熱心で、知識・技 術が急速に成長しています。今後、この治療法が広く普及していくことを望んでいます」(AMDA 副理事長 難波 妙)



## ルワンダ学校保健プロジェクト



ルワンダ小学校健診スケジュール

日付	学校名	健診を受けた 児童数(人)	問題が見つかった 児童数(人)
10月22日	キビリジ小学校	500	30
11月27日	イキレジ小学校	530	8
11月28日	ウムチョムイーザ 小学校	224	3
12月4日	ブササマナ小学校	43	5
	合計	1297	46

AMDA は 2015 年より特定非営利活動法人『ルワンダの教育を考える会』とともに、ルワンダにおいて学校健診を行ってきました。現在は、キビリジ地区の病院に勤務するサフィナ医師が同僚の医師たちとともに、この活動に取り組んでいます。サフィナ医師一行は、2024 年 10 月から 12 月の間に、4 つの小学校で 1,297 名の児童を対象に学校健診を実施。以下の健康問題を見つけることができました。

[停留精巣:15 例、臍ヘルニア:8 例、不整脈:1 例、小頭症:1 例、ダウン症:1 例、眼科的問題:1 例、耳介腫瘍:1 例、栄養失調:20 例]

4つの小学校で確認された健康問題の中で最も多かったのは、停留精巣です。またルワンダの貧困地域にあるキビリジ小学校では20名の児童が栄養失調状態であることがわかりました。停留精巣や栄養失調は適切な治療や介入で対応できるものです。不整脈や眼、耳の問題に対しては、より専門的な医療機関を紹介し、検査を行う必要があります。また発達の遅れを伴いやすいダウン症や小頭症の児童に対しては、継続的な発達支援が必要となります。



学校健診は病気を早期発見し、適切な医療や支援に繋ぐとともに、保護者や教員が児童の健康状態を把握し、健康問題への意識を高めることにも貢献します。ルワンダの小学生の健康増進と死亡率低下を目指して、今後も他校での健診を行っていく予定です。 (プロジェクトオフィサー 小川 直美)

## AMDA 本部スタッフによるインド訪問

11月中旬、インド・ブッダガヤにある AMDA ピースクリニック(以下、APC)を AMDA 本部職員が訪問しました。

#### Day-1: APC 妊婦健診

この日は、2週間に1度の妊婦健診が行われました。14時から開始され、今回は25人が診察に訪れました。妊婦さん一人一人に対して、顔写真や個人情報、これまでの診察の記録が記されたカルテが手渡されます。体重測定等を行った後、順番に医師による診察が行われました。血圧測定や触診、状態によっては、血液検査も行われます。必要に応じて薬も無料で配布されました。医師の問診や、薬の説明を聞く際の妊婦さんの真剣な表情がとても印象的でした。この活動がどれだけ多くの命の安全な誕生につながっているだろうと改めて感じました。



#### Day-2: AMDA あおぞら食堂



毎週火曜日に行っている食事支援(通称"

AMDA あおぞら食堂")が開催されました。真夏に比べると、少し涼しくなってきたものの、日差しは強く、対策として APC 屋上の木陰に机が並べられました。この日提供されたメニューは、野菜カレー、ダルカレー(豆カレー)、白ごはんでした。

食事支援開始の9時半以前から、玄関の前には子どもたちが集まり、とても楽しみにしている様子でした。参加者は、まず入口付近で整理券を受け取ります。そのまま二階へと移動し、手を洗ってから、机につきます。地元の子ども達をはじめ、タクシーの運転手、車椅子の方々、近くにある盲学校の生徒の皆さんなど、さまざまな方が訪れました。「たくさん野菜を食べること

ができてうれしい!」「おいしかった!ありがとう!」などの声を生で聞くことができ、非常に嬉しかったです。

#### Day-3: APC マタニティクラス

毎週水曜日に行うマタニティクラス(健康教育・栄養プログラム)が実施されました。まず、それぞれがカルテを持ち、APC スタッフによるカルテのチェックと血圧測定が行われます。訪れた妊婦さんは、子どもを連れた方も多く、お互いに子ども達の面倒を見あう様子がとても印象に残っています。クリニックの奥では、もう1人のスタッフが野菜スープの準備をしていました。その後、APC スタッフと妊婦さんが話題を決めずに対話する健康教育が行われ、野菜スープが配布されました。月に二回の健診だけではなく、APC スタッフによるフォローや、栄養面のサポートに対する必要性を改めて実感しました。



今回の訪問では、APC の一連の活動が、新しい命が安全に誕生するために必要不可欠であると改めて実感しました。 AMDA では、今後も引き続き APC での活動を行っていきます。 (プロジェクトオフィサー 金高 摩耶)

## ネパール・ブトワール市より副市長および AMDA 関係者が来日

2024年10月14日から18日にかけて、AMDAネパール子ども病院の運営管理にご協力いただいているネパール・ブトーワル市副市長、同市商工会議所の理事、子ども病院看護部長の女性3名が来日。岡山県内の行政、教育、医療の各機関を

訪問しました。



一行は、特に、総社市が行う障がい者支援、真庭市が廃棄物処理コスト削減のために取り組む、メタン発酵による生ごみの再資源化、医療機関の最新医療技術などに、関心を寄せていました。また。思考だけでなく、働くスクッフによりを向け



た、患者だけでなく、働くスタッフにも目を向け、スタッフ用の休憩スペースや保育 園を整備し、働く環境を整えている倉敷中央病院の姿勢にも感銘を受けていました。

副市長らは、日本での学びを活かし、女性の目線に加えて、政治家、起業家、医療 従事者、それぞれの視点から、ネパールにおける教育、行政、医療の発展に貢献して いきたいと意気込みを語りました。 (ネパール事業担当 あるちゃな ジョシ)

## 使わないで眠っている年賀はがき、官製はがき、 切手はありませんか

切手、ハガキは未使用のものであれば、古いものでも差し 支えありません。ご協力よろしくお願いいたします。

書き掲じはがき、 未使用切手等を 右記までお送り ください。

## AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム

2024年も下記の日程で、協定先自治体での防災訓練等に参加しました。

6月28日	徳島県美馬市	美馬市防災訓練の見学	
8月8日	高知県	南海トラフ地震防災対策協議会(第9回) →	
10月6日	高知県須崎市	須崎市制施行 70 周年記念式典に出席	
10月11日		第1回協力医療機関ミーティング	
11月17日	岡山県赤磐市	赤磐市総合防災訓練にパネル展示で参加	
11月30日	岡山県備前市	備前市総合防災訓練にパネル展示と講演で参加 →	
12月5日		第2回協力医療機関ミーティング	

尚、第6回南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議を開催する予定でしたが、台風の影響により延期とすることになりました。多くの方に参加していただけるよう、次回に向けて新たに調整を進めています。

(AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム合同対策本部 本部長 大西 彰)

#### ◆ AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関ミーティング◆



今年度より同プラットフォームの新たな取り組みとして、「協力医療機関ミーティング」を開催しています。第1回は10月11日に倉敷中央病院、第2回は12月5日に倉敷成人病センターに、それぞれ会場を提供していただき、会場とオンラインのハイブリッド形式にてミーティングを行いました。

ミーティングでは、参加者に AMDA の取り組みについて理解を深めていただくとともに、AMDA の緊急救援活動に参加経験のある方をゲストスピーカーにお招きして、実際の災害支援について講演を行っていただきました。

ミーティングには各回ともに 10 以上の関連機関が参加され、参加者からは、「災害支援について学ぶ良い機会になった」とのお声をいただいています。今後も協力医療機関との関係強化と、南海トラフ地震発生時の対応力の向上を目指して、定期的に開催する予定です。 (プロジェクトオフィサー 小川 直美)

## おかやまコープフェスタ 2024 開催 (2024年9月28日 コンベックス岡山)



今年もおかやまコープ主催の『コープフェスタ 2024』に AMDA のブースを出展させていただきました。今年はコープ 50 周年を喜び合うイベントとして開催され、

AMDA の活動パネルの展示、能登半島地震支援活動の動画配信、世界の民族衣装体験を提供しました。AMDA のブース前でクイズラリーのチェックポイントを設置し、家族で AMDA クイズにチャレンジしてもらうなど AMDA に関心を持っていただく機会となりました。多くのブースでは、コープが取り扱う商品の販売に沢山の来場者が集まり、コープ商品の人気ぶりが伝わってきました。

おかやまコープと AMDA は 2007 年に協定を 結んでおり、AMDA が実施する国内外での緊急

救援活動などに対して、ご支援とご協力をいただいています。おかやまコープは34万世帯を超える組合員様から構成されており、多大なご理解とご協力で支えられています。 (財務部長 難波 比加理)



#### AMDA 新理事 ご紹介

#### ■ 数学者 秋山仁先生



人生の師、秋山仁先生は世界的数学者として様々な数学の未解決問題を解き明かし、また教育現場では長年にわたり各界の人材育成に貢献してきました。「自分の人生を切り開く力を身につける」、そして「自分が心から楽しいと思えることを全力で続けていく」、これらは秋山先生から学んだ私の原点です。

個性を貫く生き方の中には、思いやりの心と、自分と異質な他人を認められる寛容な心が重要であると学びました。AMDAの重要な役割である次世代の人材育成において、秋山先生が実践してきた生きる力を養う教育は、幸せな未来を切り開く鍵になると確信しています。 (AMDA 理事長 佐藤 拓史)

#### ■ 岡山大学 頼藤貴志教授(疫学・衛生学分野)



頼藤先生は、長年にわたり AMDA の活動に関わっています。2007年の AMDA International インド会議以降、2016年の熊本地震をはじめ、2024年の能登半島地震など、緊急医療支援の最前線に立ってきました。また、ルワンダの学校健診事業も主導しています。水俣病の研究や岡山県感染症対策委員会にも従事する頼藤先生の豊富な知識と鋭い洞察力が、AMDA の活動の現場でも活かされています。

(AMDA 副理事長 難波 妙)

#### AMDA 中学高校生会、倉敷国際ふれあい広場に参加

10月13日、倉敷市芸文館で開催された『倉敷国際ふれあい広場』にて、AMDA中学高校生会がパネル展示を行いました。サイコロを使ったゲーム形式を説明に取り入れたり、英語での活動紹介に挑戦するなど、中高生らしい工夫を加えながら取り組むことができました。

また、会場内には国際色豊かなブースが数多く出展しており、参加者自身の出身国や文化について紹介し合う姿もとても印象的でした。

その他にも、イベントでは、在日外国人の方々と英語で意見交換を行う 『おしゃべりカフェ』などの異文化理解のためのプログラムも用意されて おり、参加したメンバーにとって学びの多い1日となりました。



日曜日の開催ということもあり、老若男女を問わず、沢山の方が来場し、AMDAと AMDA 中学高校生会を広く知っていただく良い機会になったのではないかと思います。 (プロジェクトオフィサー 金高 摩耶)

#### AMDA こども食堂プラットフォーム事業

今秋、岡山県内のこども食堂 16 団体に、お米計 240 キロ、サツマイモ計約 130 キロ、ならびに備蓄の親子丼や牛丼などのレトルト食品を提供しました。サツマイモは、AMDA 御津農場でサツマイモの栽培と管理をしてくださっている安信治雄さんのご協力により収穫したものです。

こども食堂から、「お米が高騰しているので大変助かります。いつも厳しい予算で頑張っているので、みんなで感謝していただきました」「ひとり親家庭では、生活が困窮していることや悩みを一人で抱え込むことが多いように見受けられました」「子どもたちは、おにぎり作り体験コーナーで、サツマイモご飯のおにぎりやツナマヨおにぎりを作りました。こども食堂という安心して過ごせる居場所の中で、食事があることや、お友達同士で食べること、宿題をしたり、遊んだりして自由に過ごせることが、子どもたちの『また来たい』という思いに繋がっているように思います」との報告がありました。

当プラットフォームでは、子どもと大人同士の食を通じた交流により、子どもが心豊かに育つよう今後もサポートしていきます。



(財務部長 難波 比加理)